

2023年1月22日「宣教の開始」

青戸教会

高橋克樹牧師

聖書 民数記9章15〜23節、ルカ福音書4章16〜30節

主イエスは洗礼を受けられたあと、荒れ野で40日間、断食をしたあと、最終的に悪魔から誘惑を受けられたのでした。40日間何も食わずにいたので、空腹を覚えられたのでした。そこで悪魔はその空腹という人間存在の危機的な状況のなかで、主イエスを誘惑する総仕上げの意味で、「神の子ならば、この石をパンに変えてみたらどうだ」と主イエスを試みたのでした。主イエスは、人間はパンなしには生きられないけれども、一方で、人間はパンだけで生きていくのではないということが悪魔に対して言ったのでした。そこで悪魔は次の手段に出ます。世界の国々の一切の権力と繁栄を見せて、それをすべて与えようという誘惑の言葉を告げて、主イエスを試みたのでした。権力や富による繁栄は人間にとって普通は抗しがたい誘惑です。それでも悪魔の誘惑に屈しなかったので、悪魔はユダヤ人にとって精神的な支柱であるエルサレム神殿に主イエスを連れて行って神殿の屋根の端に立たせて、「神の子ならここから飛び降りることができたらどう」と、誘い込んできたのです。それにも動じなかった主イエスに対して、悪魔は一旦離れ去っていきます。

私たちはこのような誘惑を退けることができたのは主イエスが神の子だからこそであつて、そういう誘惑を退けたからこそ、神の国の福音を告げ知らせる伝道をガリラヤで始めることができたと考えがちですが、主イエスに対する試練はこの後も続くのです。

さて、主イエスはガリラヤで伝道を始められるのですが、その神の教えの内容によって、主イエスは人々から尊敬を受けるほどに、その評判が広まったのでした。けれども、イエスの生まれ故郷であるナザレで安息日にユダヤ人の会堂に入つて、いつものように神の教えを語ろうとしたのでした。ユダヤ人は安息日に礼拝を行います。その際に、旧約聖書の律法や預言書がヘブル語で読まれるのですが、そのヘブル語の内容を当時の多くのユダヤ人は理解できなかったのです。というのも、当時のガリラヤではユダヤ人もコイネーギリシャ語を話していたので、ヘブル語の旧約聖書の意味を解説してくれる人を礼拝の参加者の中から、会堂司が依頼して礼拝を行っていたのです。

16節以下によると、ヘブル語の朗読のところすでに主イエスに依頼していたようです。イザヤ書の61章の箇所を朗読した後、イエスはそのイザヤ書が書かれてある巻物を会堂司に戻して、21節にあるように、「主が私を遣わされたのは、捕らえられている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」というイザヤ書の言葉が「今日実現した」と語つてのち、さらに、そのイザヤ書の言葉が実現したということの詳しい内容を話されたのです。それを聞いたユダヤ人の会衆はイエスの語られる恵み深い言葉に驚いたのですが、ナザレはイエスの故郷ですから、イエスが「大工のヨセフの子」であることに気づいた者がいて、それまで恵み深い内容と思われていた言葉が、それほど価値がないことを言外に指摘したのです。大工の子が旧約聖書の内容に詳しい教育を受けているわけがないというのです。当時の職人の家庭では、大工の子は大工になるのが普通のことでしたから、律法に詳しい教育を受けることは普通ありえないからです。

ところが、主イエスは「医者よ、自分自身を治せ」ということわざを引いて、「カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ」と言って、奇跡的な癒しの業をしたことを郷里のナザレでもしてくればイエスの語った言葉を信じることができると言うに違いないと批判的な人たちの対応を先回りして話したのです。そして「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言って、エリヤの故事を引いて、ユダヤ人ではなくて異邦人のシリア人ナアマンの重い皮膚病しか治されなかった歴史的な事実を会堂にいたユダヤ人たちに突きつけたのです。預言者エリシャの時代にイスラエルでは重い皮膚病を患っている人がたくさんいたのですが、異邦人であるシリア人のナアマンのほか誰も清くされなかったという故事が紹介されたのです。この発言によって、イザヤ書61章を解説した最初の内容が「今日ユダヤ人たちに実現した」と言っていた前言は異邦人に対する神の恵みのことであって、神の恵みに真っ先に浴することができるユダヤ人の特権性が否定されたと受け止めた会衆は皆憤慨して総立ちになって、イエスを町の外に追い出し、崖から突き落とそうとしたのです。それは主イエスのイザヤ書61章の最初の解説がユダヤ人に対する神の恵みの言葉だと受け止めていた会衆にとって、実は主イエスが言った内容は、異邦人にもたらされることだと判明したからです。ですから、会衆は主イエスを会堂から追い出して、崖から突き落とそうとしたのです。しかし、主イエスはそのように自分に迫ってくる会衆の間をすり抜けて立ち去られたのでした。

主イエスは、悪魔からの誘惑を受けても、それを退けることができましたが、故郷のナザレでも同じように試練を受けたのでした。宣教活動の最初の段階ですでに主イエスの福音宣教の活動には暗雲が立ち込めていたのです。けれども、主イエスは決してユダヤ人よりも異邦人が神の恵みに先に浴するということを考えていたのではないと思われず。ルカ福音書の記者は主イエスの語った福音が異邦人に受け入れられることを非常に重視しているのです、異邦人に福音が宣べ伝えられることをユダヤ人が妨げる構図を何度も描いているので、主イエスがユダヤ人から拒絶される場面が何度か出てくるのですが、歴史上の主イエスはユダヤ人とか異邦人という区別を自ら行うようなことはしていません。ですから、故郷ナザレの会堂での出来事は選民意識が強いユダヤ人にとっては、イエスがユダヤ人に救いが最初にもたらされることを言うのでなければ、主イエスは受け入れられなかったでしょう。けれども、主イエスはユダヤ人、異邦人の区別を抱くことなく、神の救いが当時のユダヤ人の常識からすれば、罪人だから重い皮膚病になったのだと決めつけられていた病人に癒しをもたらしたのです。また、ローマ帝国の手先として嫌われていた徴税人レビを弟子として召していたことを見ても、神の祝福は人種の区別なく、神の御旨を真剣に求める人の思いに応えて与えられることを伝えようとしていたのです。

そういう主イエスの基本的な姿勢があったので、現代の私たちにも神の祝福が受け継がれているのです。教会は新しいイスラエルとして神の恵みに浴する新しい信仰者の群れなのです。主イエスが宣教した神の祝福は私たちキリスト者に2000年の時を経て、受け継がれているのです。私たちキリスト者個人個人は小さな存在ですが、2000年の間、この小さな存在の一人ひとりの信仰が主イエスの宣教から受け継がれてきたものなのです。そういう意味で、私たちは、この主イエスの宣教の後継者であるのです。この光栄ある務めが私たちに与えられているのです。どちらかと言うと、私たちは自分の人生の歩みの上に表された神の祝福にだけ目を向けがちですが、主イエスの宣教活動の後継者でもあるという光栄ある務めに招かれていることを心に留めたいと思います。